ソ連という社会体制は何だったのか

――マルクス・エンゲルスとスターリン主義（二）――

小　松　善　雄

目次

Ⅰ　ソ連型社会主義はなぜ，自壊したのか（第62巻第４号）
――はじめにに代えて――
Ⅱ　ヴィリッヒ＝シャッパーの兵営共産主義像（本号）
――共産主義者同盟の解散をもたらしたもの――
Ⅲ　バクーニン＝ネチャーエフの兵営共産主義
――第１インターナショナルの解体をもたらしたもの――
Ⅳ　バクーニン＝ネチャーエフとドストエフスキー
――『悪霊』と『未成年』にみる社会主義者像――
Ⅴ　スターリンの農業集団化とソ連型兵営共産主義の確立
――ソ連型社会主義の崩壊をもたらしたもの――
Ⅵ　むすび

Ⅱ　ヴィリッヒ＝シャッパーの兵営共産主義像

――共産主義者同盟の解散をもたらしたもの――

それではまず，マルクス，エンゲルスにあっては「兵営共産主義」はどのように特徴づけられるものであったであろうか。この点を追跡してみよう。

1848年ドイツ革命後の情勢をめぐる分岐

1848年２月末，マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』の「Ⅳ 種々の反政府党に対する共産主義者の立場」において，来るべきドイツ革命に対し原則綱領，その戦略路線を与えているが，それを下記のように簡潔・明快に定式化している。

「ドイツでは，共産主義の党は，ブルジョアジーが革命的に立ち現われるやいなや，ブルジョアジーと共同して，絶対君主制，封建的土地所有および小市民層に対して闘う。

しかし，共産主義の党は，ブルジョアジーがその支配とともに導入せざるをえない社会的および政治的諸条件を，ドイツの労働者たちがただちに，ブルジョアジーに対する武器とまさに同様のものとして向けるために，またドイツにおける反動的諸階級の転覆ののち，ただちにブルジョアジー自身に対する闘争が始まるために，労働者たちのあいだに，ブルジョアジーとプ

ロレタリアートの敵対的対立についてのできるだけはっきりした意識をつくりだすことをいかなる瞬間も怠りはしない。

ドイツに対して，共産主義者はその主要な注意を向ける。なぜならば，ドイツはブルジョア革命の前夜にあるからであり，またドイツは，17世紀におけるイギリスおよび18世紀におけるフランスよりも，ヨーロッパ文明一般のいっそう進歩した諸条件のもとで，またはるかに発展したプロレタリアートをもって，この変革をなしとげるからであり，それゆえドイツのブルジョア革命は，プロレタリア革命の直接の序曲でしかありえないからである」(服部文男訳『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社，107–108ページ)。

このドイツ革命論はいわゆる段階革命と連続革命とを統一的に把握してブルジョア革命段階のプロレタリア革命段階への連続的転化＝連続的二段階革命の戦略綱領をはじめて明らかにしたもので，ロシア革命の戦略的規定においても決定的な影響を与えたものである。

しかもこのドイツ革命論はただちに現実に起きた革命運動の指針・方向指示器の役割を担うことになる。すなわち1848年２月，フランスにおいてルイ・フィリップの７月王朝を打倒した共和主義革命が勃発，それは３月にはドイツにおいても絶対君主制打倒をめざす革命へと連動する。マルクス，エンゲルスは同月『共産党宣言』のドイツ革命の戦略路線にのっとり『ドイツ共産党の要求』を練り上げ，「単一不可分の共和国」以下，「普通選挙権」，「全国民の武装」，「あらゆる封建的負担の補償なしの廃止」，「王侯領その他の封建的領地・鉱山炭鉱等の国有化」，「農民の抵当権の国有化」，「地代・小作料の国家への租税への転化」，「私的銀行の廃止による国立銀行の設立」，「交通機関の国有化」，「国立作業場の設置」，「国家による労働不能者を含めすべての労働者の生活保障」，「無料の普通国民教育」などの諸要素を掲げ，ビラの形で宣伝につとめる。それにつづきマルクスは革命の現地ケルンに赴いて民主主義の新聞『新ライン新聞』を発行し，民主主義最左翼の立場からドイツにおけるブルジョア民主主義の完遂，社会主義への移行という永続革命の見地にたった諸論説によってカイザー・ヴィリヘルム４世と妥協したカンプハウゼン内閣，定見の定まらぬフランクフルト国民議会を鞭打ち，全人民蜂起の推進力となる。他方，エンゲルスはフランクフルト国民議会がようやく制定した憲法への擁護運動がドイツ国憲法戦役に発展すると，「『新ライン新聞』はその名誉のために［honoris causa］プファルツ＝バーデン軍のうちにも代表者をもつべき」(エンゲルス『ドイツ国憲法戦役』『全集』第７巻，161ページ）であるとしてプファルツ＝バーデン軍の主力となったヴィリッヒ[1)]の義

1）アウグスト・ヴィリッヒの履歴に関して，『マルクス・エンゲルス全集』第７巻の「人名索引」では，以下のように記されている。

「ヴィリヒ，アウグスト Willich, August（1810–1878）プロイセンのもと中尉。その政治的信念のために退役した。共産主義者同盟員。1849年にはバーデン＝プファルツの蜂起における義勇兵部隊の指揮者。1850年の共産主義者同盟の分裂にあたっては，シャッパーとともにマルクスに反対したセクト的分派の指揮者。1853年にアメリカ合衆国に移住し，アメリカの南北戦争で北軍の将軍となった」

勇兵部隊の副官につき，６倍もの優勢な兵力をもつプロイセン軍との戦闘の指揮に従事，同盟の再組織のため派遣されたヨーゼフ・モルが倒れても最後まで戦い抜くなか最後の部隊としてスイス領に足を踏み入れたのである。そこでエンゲルスは前記『戦役』でプファルツ＝バーデン軍，とくにその義勇兵部隊にプロレタリアート党はかなり多くの代表をもっていたが，「もっとも断固たる共産主義者はもっとも勇敢な兵士であった」(同，188ページ）ことを証明したという。

1848年革命の敗北後，1849年８月26日頃にマルクスはロンドンに到着，同年10月半ば，マルクスはエンゲルスの推薦状をもってスイスから到着した義勇兵部隊隊長にして共産主義者同盟

（同，33–34ページ)。

なお，アメリカ移住後のヴィリヒの事績に関しては，的場昭弘・内田弘・石塚正英・柴田隆行編『新マルクス学事典』(弘文堂，2000年）の「ヴィリヒ」の項が詳細である。

「ヴィリヒ [August Willich 1810–78]

ポーゼンの貴族出身の急進主義的活動家。

中尉となってプロイセン軍の砲兵隊長を務めたが，その急進的言動のために除隊となり，その後大工職の修業に入る。1848–49年の革命に参加し，特に49年５月のバーデン蜂起に加わり，エンゲルスを副官として義勇軍を指揮する。革命敗北後エンゲルスらとともにスイスに亡命したが，10月，エンゲルスの推薦状を携えてロンドンのマルクスを訪ね，マルクスは彼を共産主義者同盟中央委員会メンバーに迎えた。だがヴィリヒは翌50年秋，同盟内でシャッパーらと組んでマルクスらに反対する行動をとることになった。対立の要因に関連して，マルクスは『ケルン共産主義者裁判の真相』の中で次のように述べている。『少数派は，批判的見地の代わりに独断的な見地を持ち出し，唯物論的な見地の代わりに観念論的な見地を持ち出している。少数派にとっては，革命の推進力となっているのは，現実の諸関係ではなくて単なる意志である』[邦訳第８巻：398ページ]。

ヴィリヒはやがて1853年北アメリカへ移住する。合衆国に渡ったヴィリヒは，当初はドイツにおける再度の蜂起をめざしていた。これを目的として諸州を広範囲に旅行し，ドイツ共和国樹立のための在アメリカ・ドイツ人組織の拡充に努めた。その一環として彼は，シンシナティを拠点に『シンシナティ・リパブリカン』という新聞を発行した。だが，その間にヴィリヒの活動は再度のドイツ革命を目標とするのでなく，合衆国における「普編的人間性・社会革命・政治道徳」を基盤としたあらたな政党結成を目標とするようになっていく。その際ヴィリヒは，ドイツ革命時に示した組織的指導力を合衆国でも申し分なく発揮していく。例えば，南北戦争が勃発すると，彼の指導によってドイツ人からなる第９オハイオ連隊が数時間のうちに創設された。

南北戦争後の1870年，60歳の時にヴィリヒは，ドイツに一時帰国した。できればプロイセン王室に関連した仕事に就きたいと当局に申し出たが，断られた。そのこともあって，ヴィリヒについて，ホーエンツォレルン家の出身という噂が流れた。また，ロンドンのマルクスは，ニューヨークのヴァイデマイヤーの情報を元に一貫してヴィリヒを酷評し続けた。けれども，アメリカ時代のヴィリヒはけっして「単なる意志」「観念論的な見地」では行動せず，むしろ，労働する移民の国アメリカに最もふさわしい政治形態としての労働者共和国の建設を推進するべく，実践的な努力を重ねたのである。晩年を過ごした地シンシナティ郊外のセント・メリーにはヴィリヒの記念碑が建っている。

[文献] F. メーリング（足利末男ほか訳）『ドイツ社会民主主義史』上巻，ミネルヴァ書房，1968. 的場昭弘『フランスの中のドイツ人――1848年革命後の移民，亡命者，遍歴職人と社会主義運動』御茶の水書房，1995. T. Vickers, *August Willich*, Cincinatti 1878. (石塚正英)」(同，44–45ページ)。

員ヴィリッヒに会ったのち，マルクスの提案でヴィリッヒは共産主義者同盟中央委員会に迎え入れられる。11月10日頃，エンゲルスもロンドンに到着，同じく同盟中央委員会に迎え入れられる。

1850年に入ると，マルクス，エンゲルスは『新ライン新聞　政治経済評論』を発行，その第１号，第２号，第３号にのちにエンゲルスによって『フランスにおける階級闘争』と題してまとめられたマルクスの三つの論文とエンゲルスの『ドイツ国憲法戦役』が掲載される。それとともにマルクス，エンゲルスは「1850年３月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」を起草し「現在，新しい革命が迫っており」(第７巻，250ページ）という革命的情勢にあるという現状認識から「来るべき革命では，民主主義的小ブルジョアが自由主義的ブルジョアに代わって裏切的な役割を引き継ぐという見通し」(同，250-251ページ）にたって，革命的労働者党は小ブルジョア民主党に対し，大ブルジョアと戦う限りでは「共同」，小ブルジョアの利益の地歩を固める場合は「反対」の態度をとるとする。

しかし「民主主義的小ブルジョアは革命的プロレタリアのために全社会を変革するつもりは少しもなく，現存の社会をできるだけプロレタリアにとって我慢のできる，快適なものとする，そういう社会状態の変更をめざしている」(同，252ページ）にすぎない。そこで官僚制度の縮小＝国家支出の減少，大地主・大ブルジョアへの租税の重課，公共信用機関の設置，高利取締法の制定による国家からの有利な貸付の獲得，封建制度の一掃によるブルジョア的所有関係の実施，小ブルジョアと農民を多数派にする民主的な国家組織と民主的な市町村制度の創設，資本の支配とその急激な増加を抑制するための相続権の制限と国家への事業移管を要求するにとどまる。ちなみに最後の国家への事業移管は一種の国家資本主義の試行であり，国有化の限界を語るものでもあるので直接引用しておこう。すなわち国家へ事業が移管されたとしても「労働者については，彼らが今後もこれまで通り賃金労働者のままでいなければならないことは何よりもはっきりしているが，ただ，民主主義的小ブルジョアは，労働者がもっと良い賃金をもらい，もっと安定した生活をおくるようになることを願っており，国家による彼らの部分的な雇用と慈善的な措置とで，この目的を達成することができるだろうと考えている。つまり，多かれ少なかれ隠された施し物で労働者を買収し，その生活を一時的にしのぎやすくしてやることで労働者の革命的な力をくじこうと考えているのである」(同上)。

小ブルジョア民主党のこれらの諸要求はマルクスによって民主党が前進するならば革命に対して望みうる最大限綱領になるものとしてまとめたものであるが，この諸要求はその後，19世紀後半から20世紀後半までに形づくられる福祉国家の先取りであるともいえる。

それではこれに対し，革命的プロレタリアートは何を要求して対置するのか。「われわれの利益とわれわれの任務は，多少とも財産を所有するすべての階級が支配的地位から追いのけられ，プロレタリアートが国家権力を掌握し，一国だけでなく全世界のすべての主要国のプロレタリアの結合が著しく進んで，その結果，これらの国々でプロレタリア同士の競争が止み，少

なくとも決定的な生産力がプロレタリアの手に集中されるまで，革命を永続させることである。われわれにとって必要なのは，私的所有を変更することではなくてまさにそれを廃絶することであり，階級対立をごまかすことではなくて階級を廃止することであり，現存の社会を改善することではなくて新しい社会を建設することである」(同，253ページ)。

すなわち世界革命が完遂されるまで革命を永続させ，私的所有の廃絶・階級の廃止のうえに立つ新社会の建設である。

しかしそのためには「労働者，とりわけ同盟は，またしてもブルジョア民主主義者に喝采を送り，合唱隊の役をつとめるまでに身を落さないで，公式の民主党と並行して秘密組織といわず公然の組織といわず，労働者党の独自の組織をつくりだし，[同盟] の各班を労働者協会の中心・中核とすることを目標としなければならない。この労働者協会ではプロレタリアートの態度や利害が，ブルジョア的な影響から離れて討論されているのである」(同，253-254ページ)。

さらに労働者党を強化・発展させるために労働者クラブ，それも「州規模での労働者クラブの連合」を組織することが重要であるとされている。

そこでこれらの革命勢力は「闘争の最中にも，闘争のあとでも，労働者は，機会あるごとにブルジョア民主主義者の要求と並べて労働者自身の要求を押し出さなければならない」(同，254-255ページ)。

そこで蜂起＝市街戦の勝利ののち民主主義的小ブルジョアの新政府が成立したならば，独自の労働者政府を樹立するとともに独自のプロレタリア警備軍を組織し，二重権力状態をつくり出さなければならないとする。

「労働者は，新しい公式の諸政府と並行して，市町村参事会や市町村議会であれ，労働者クラブまたは労働者諸委員会を通じてであれ，独自の革命的な労働者諸政府を打ち立て，こうしてブルジョア民主主義的諸政府からただちに労働者の支持を奪い去るだけではなく，労働者の全大衆を後にひかえ権力機関によってはじめから監視されて威嚇されているのだということを，これらの政府に理解させなければならない」(同，255ページ)。

これにくわえて，さらにいう。

「勝利したその瞬間から労働者を裏切りはじめるこの党に，精力的に，威嚇的に対抗できるためには，労働者は武装され，組織されていなければならない。[……] 労働者を敵視した古い市民軍の復活を阻止しなければならない。だが，これを阻止することが実行不可能なところでは，労働者は，自分で選んだ隊長と自分で選んだ独自の参謀部とをもつ独自のプロレタリア警備軍を組織して，国家権力の指揮ではなく，労働者によって打ち立てられた革命的市町村議会の指揮のもとに入ることに努めなければならない」(同上)。

もっともこれらの政府は臨時革命政府であるからすぐ続く普通選挙権のもとでの「国民代議機関の選挙」(同，256ページ) に臨まなければならない。

なお，この選挙で大きな争点になるであろう封建制度の廃止の問題に対し，マルクスは小ブ

ルジョアジーが持ち出している第一次フランス革命時と同様の封建的領地の分割地所有に反対し，封建的所有の国有化とそのもとでの農村プロレタリアートの結合＝農業生産協同組合の組織化を呼びかけている。

「労働者は，没収された封建的所有をそのまま国有地として，労働者入植地（コロニー）に当てるように要求しなければならない。結合した［アソツィールト］農村プロレタリアートが，大規模農業のもちうるあらゆる利点を用いて，それを耕作する。こうすれば，ぐらついているブルジョア的所有関係の真ん中で，共同所有の原理がただちに強固な基礎を獲得することになる」(同，257ページ)。

それとともに統治形態では連邦共和制を主張する民主主義者に対し「単一不可分の共和国」をめざすとし，ドイツにおける領邦的割拠が示す「地方・州の我意を大量に打ち取らなければならない」だけでなく，革命的活動が「中央から指揮されてこそ全力量を発揮できる」(同上)がゆえに「1793年のフランスでそうであったように，今日のドイツでも，もっとも厳格な中央集権化を実現することが真の革命党の任務である[*2)]」(同上）とする。

もっともマルクスは国民議会選挙では小ブルジョア民主主義党が支配権を握るとみて，その場合の対抗方策も述べる。それは「民主主義者の譲歩と方策の程度による」としつつも，

「(１）民主主義者を強制して，できるだけ多くの方面にわたって既存の社会制度に侵害を加えさせ，その規則的な歩みを攪乱させ，自ら自分の信用を落していくようにしむける。また，できるだけ多くの生産力，運輸手段，工場，鉄道等々を国家の手に集中するようにしむける。

（２）民主主義者は，どのみち革命的なやり方はせずに，たんなる改良的なやり方をするだ

２）ここで一つの付記をしておかなければならない。というのはエンゲルスは［1885年版への原注］において「1793年のフランスでそうであったように，もっとも厳格な中央集権化を実現すること」というのは「一つの誤解」であり「真の革命党の任務」たりえないとしているからである。

＊「今日では，この個所が一つの誤解にもとづいていることを注意しておかなければならない。これが書かれた当時には，フランスの中央集権的な行政機構は大革命によって導入されたもので，とくに王党および連邦主義派の反動や外敵を打ち破るさいになくてならない決定的な武器として，国民公会によって運用されたとういことが，――ボナパルト派や自由主義派の歴史偽造家のおかげで――まちがいのないことだとされていた。しかし，いまでは次のことが周知の事実となっている。すなわち，ブリュメール18日にいたる全革命期をつうじて，県，郡，市町村の全行政機構は，行政区民自身によって選ばれた官庁からなっていて，これが一般国法の範囲内で完全な自由をもって行動したということ，アメリカのそれに似たこの州および地方の自治こそ，革命のもっとも強力な梃子となったということである。これは，ナポレオンがそのブリュメール18日のクーデタの直後に，急いでこの自治を廃止して，今日なお続いている知事制に切り変えたほどであった。だから，知事制は初めから純然たる反動の道具であった。しかし，地方および州自治は，政治的・国民的中央集権化と矛盾するものではないにせよ，他方では，スイスであのようにいとわしい形をとって現われている狭量な州または市町村利己主義とも，必ずしも結びつくものではない。ところが，1849年には，南ドイツの連邦制共和論者のすべてが，こういう州および市町村利己主義をドイツの基準としたがっていたのである［1885年版へのエンゲルスの原注］」(同、257-258ページ)。

けであろうが，労働者は，この民主主義者の提議を極論までおしすすめて，私的所有に対する直接の攻撃に変えなければならない。たとえば，小ブルジョアが鉄道や工場を買い上げようと提議したなら，労働者は，これらの鉄道や工場を反動分子の財産として，国家がそのまま無償で没収するように要求しなければならない。民主主義者が比例式の租税を提議したなら，労働者は累進税を要求する。民主主義者自身が軽度の累進税を提案したなら，労働者は大資本が潰れるほどの急角度で税率が高くなっていく租税を主張する。民主主義者が国債の整理を要求したなら，労働者は国家の破産を要求する」(同，258ページ)。

つまり生産諸手段の無償没収による国有化，重度の累進課税などによって小ブルジョア民主主義党をできるだけ「左」へ押しやるとする。

こうであってみれば「この来るべき革命劇の第一幕がフランスにおけるプロレタリアートの直接の勝利によって大いに速められることは確実」(同，259ページ）であっても，「ドイツの労働者は，かなりに長い革命的発展を完全に経過し尽さないうちは，支配権を握ることもできず，彼らの階級的利益を貫くこともできない」(同上)。

そこで「プロレタリアートとの戦いの鬨（とき）の声はこうでなければならない――永続革命，と」(同上)。

そして引きつづき「1850年６月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」において同盟の現状報告をおこなうとともに「中央委員会は，事態がきわめて緊迫しており，新しい革命が勃発する日までもはや間のないこのときこそ，すべての同盟員が全力をあげて活動するよう要請する」(同，319ページ）と結び，新たな革命を翹望している。

だが，50年７月末，マルクスとエンゲルスは『評論　1850年５月－10月』を執筆するなかで「３月の呼びかけ」の前提をなす「現在，新しい革命が迫っており」という現状認識の再検討をよぎなくされる。というのもヨーロッパの経済情勢に新しい決定的変化が生じたからである。すなわちイギリスにおいて1837–38年の不況期を脱したのちにやってきた1843–45年の繁栄期への反動が45年10月に始まって以降，鉄道恐慌が本来の商業恐慌，金融恐慌に発展し，イギリスでは47年の10月にピール条例が停止され，イギリス発の恐慌は大陸にはね返り，恐慌が1848年の諸革命を促進する。しかし，48年の３月には大陸からの資本流入でイギリスの恐慌が終了し，新しい産業循環が始まる。そして1851年のロンドン博覧会の開催，カリフォルニアの金鉱発見に支えられたイギリスとアメリカの繁栄はヨーロッパ大陸に反作用を及ぼし，49–50年にはドイツ，フランスも好況期に入り，全般的好況が現出する。「恐慌の時期が大陸ではイギリスより遅れて始まるように，好況の時期も遅れて始まる」(同，450ページ)。だが「全般的好況の場合は，ブルジョア社会の生産力がおよそブルジョア的諸関係内で発達しうる限りの旺盛な発達を遂げつつあるのだから，本当の革命は問題にならない。そうした革命はこの二要因，つまり近代的生産力とブルジョア的生産形態が互いに矛盾に陥る時期にだけ可能である。[……] こうした基礎にぶつかっては，ブルジョア的発展を抑えようとする反動のあらゆる試みも，民

主主義者のあらゆる道徳的憤慨や感激的宣言も，ともにはじき返される」(同上。傍点，マルクス，エンゲルス)。そこでマルクスとエンゲルスはこう結論づける。「新しい革命は新しい恐慌に続いてのみ起こりうる。しかし革命はまた恐慌が確実であるように確実である」(同上)。

ところがこの『評論　1850年５月－10月』の「全般的好況の場合は，本当の革命は問題にならない。新しい革命は新しい恐慌に続いてのみ起こりうる」という新たな現状認識は「1850年３月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」の「現在，新しい革命が迫って」いるという現状認識の改変であり，当然，革命運動の基本的任務の軌道修正につながるものであったから，ロンドンの共産主義者同盟中央委員会の内部で激烈な論議が引き起こされ，マルクス・エンゲルス派とヴィリッヒ＝シャッパー派との組織的決裂にまで発展する。のみならずこの組織的分裂は，ヴィリッヒ＝シャッパー派がその保管文書をプロイセン警察が盗み出すのを容認していたところから，その文書をもってケルンの同盟の指導的党員が逮捕されるというケルン共産党裁判がフレームアップされるに及んで，同盟そのものの解散をよぎなくされるにいたる。

ヴィリッヒ＝シャッパー派に対するマルクス，エンゲルスの党内闘争

では，その決裂と解散はどのように展開したのか。共産主義を掲げた世界最初のプロレタリア政党にあって，マルクス，エンゲルスがいかに党内闘争に対処したかを正確に知るために，『全集』第７巻・第８巻・第９巻・第10巻のクロニクル「マルクスとエンゲルスの生活と活動」その他によってマルクスとヴィリッヒとの出会いから，1850年の組織分裂をへて『亡命者偉人伝』原稿の数奇な運命，『ケルン共産党裁判の真相』刊行をめぐる闘争，『気高い意識(こころ)の騎士』出版にいたる，４年余にわたるなりゆきの仔細をみておこう。

これらの資料をフォローすると，1850年４月にマルクスとエンゲルスは，ヴィリッヒとともに共産主義者同盟中央委員会を代表してフランスのブランキ派亡命者，革命的チャーティストと接触を保ち，この三組織の代表者を結集する「革命的共産主義者万国協会」の創立に参加する。だが７月末には，ロンドンの小ブルジョア的亡命者組織と組織的に接近せよと要求するヴィリッヒとマルクス，エンゲルスら中央委員会の多数派とのあいだに意見の相違が表面化。『評論　1850年５月－10月』において「全般的好況の場合は，本当の革命は問題にならない」という結論に達していたマルクスとエンゲルスはプロレタリア党の独立性を保持して将来の革命的闘争の準備を整えさせるという新しい戦術方針を規定し，中央委員会で主張する。そして８月28日頃，社会＝民主主義亡命者委員会の会議の席上で，マルクスら多数派とヴィリッヒとのあいだで烈しい衝突が生じ，ヴィリッヒは委員会からの脱退を表明。翌日，ロンドンのドイツ人労働者教育協会の集会で，マルクスとエンゲルスは脱退を表明したヴィリッヒに批判を浴びせる。そして９月15日，マルクスは共産主義同盟中央委員会の会議で，ヴィリッヒに同調したシャッパー[3)]が情勢評価を誤り，それと結びついて冒険主義的戦術をとったとして二人を批

3）カール・シャッパーの履歴に関して『全集』第７巻の「人名索引」では，以下のように記されてい

る。

「シャッパー，カール　Schapper, Karl（1812ころ-1870）　義人同盟およびロンドンのドイツ人労働者教育協会の指導者のひとり。共産主義者同盟の中央委員。1848年には『新ライン新聞』の校正係，ライン民主党地区委員会の委員。1849年２-５月にはケルン労働者協会の会長。1850年の共産主義者同盟の分裂にあたっては，ヴィリヒとともにマルクスに反対したセクト的分派の指導者。まもなく自分の誤りを認め，1856年にふたたびマルクスと結びついた。1865年には第１インタナショナル総評議会のメンバー」(同，44ページ)。

なお，シャッパーの義人同盟から共産主義同盟への改編に当たっての役割に関しては前掲『新マルクス学辞典』が詳細である。

「シャッパー　[Karl Schapper 1812-70]

義人同盟の創設者であり，共産主義者同盟への改組にあたっては義人同盟ロンドン支部を率いて，それを精力的に推進した人物。この過程で生まれたマルクス，エンゲルスとの交流は，48年革命後の一時期を除いて終生にわたった。また後に第１インター総評議会の委員を務めた。ヴァインバッハに地方牧師の長子として生まれ，1831年，ギーセン大学（林学科）に入学。ただちに学生組合に入り，1833年のフランクフルト蜂起に加担して，スイスに移り，G. マッツィーニのイタリア・サヴォア州遠征では，亡命ポーランド人部隊と行動を共にした。またドイツ人手工業者サークルと結びつきを持ち，精力的なプロパガンダによって手工業職人協会を生み出した。1836年スイスを追われてパリに移るや，植字工シュタンゲとともに「青年ドイツ」のクラブを設立する。これはドイツを追われた活動家が1834年４月にベルンで発足させたものであった。なお植字工としての経歴はパリで始まる。シャッパーらは，秘密結社的な色彩の追放者同盟（1834年発足）と競合し，その一部を吸収しつつ，あらたな秘密同盟，義人同盟（1836-47年６月）を創設するが，1839年11月，季節協会の蜂起に絡む追放処分によりロンドンに移る。

ロンドンでは，既存の２つのドイツ人協会に介入して，「ドイツ人労働者教育協会」を創設する(1840年２月)。これが同盟ロンドン支部の公然組織としてチャーティストや各国亡命活動家の結集軸となる。チャーティスト左派の G. J. ハーニーとシャッパーらは，シュレージエンの織布工一揆の救援やポーランドの民族解放の支援を軸として左翼の国際的連帯をめざす「友愛民主主義者協会」を発足させる（1846年３月)。こうした中でロンドン支部の指導部は，従来のブランキ＝ヴァイトリング的な直接行動・蜂起路線の見直しを始めた。シャッパーは独自の段階革命の構想を持ち，義人同盟の再編に着手する。1846年秋，ロンドン支部が同盟の最強支部として中央本部となるにいたり，この作業は本格化するが（11月，「中央委員会よびかけ」)，ヴァイトリング派問題ならびに大陸各支部の拡散状況のために停滞を余儀なくされた。同じ頃マルクス，エンゲルスはあらたに共産主義者の組織的結集をもくろんでいたが孤立していた。ここにシャッパーは，曲折はありはしたが，マルクスらとの連携に踏み切った。1847年２月，「中央委員会よびかけ」を発して，同年６月，共産主義者同盟第１回大会にこぎつける。綱領草案「共産主義の信条」はシャッパーのイニシアティブによる。11月に第２回大会が開催されて，綱領の執筆がマルクスに委嘱されるが，シャッパーの校閲を経て出版された（1848年２月)。なお1848年革命に際しては，ケルンならびにその周辺地区で大衆運動のオルガナイザーとして活動し，あるいは『新ライン新聞』の刊行に携わった。革命挫折後，ロンドンで革命の展望をめぐり「ヴィリヒ＝シャッパー派」としてマルクス派と対立したが，後に和解にいたった。

[文献] 滝口清栄「共産主義者同盟と『宣言』，K. シャッパーの功績」『情況』1998年７月号別冊。A. Kuhnigk, *Karl Schapper. Ein Vater der europäischer Arbeiterbewegung,* Limburg 1980. A. Fehling, *Karl Schappaer und die Anfänge der Arbeiterbewegung bis zur Revolution von 1848.* Phil. Diss., Rostock 1922. (滝口清栄)」(同，250-251ページ)

この義人同盟から共産主義者同盟への改編とそこでの『共産党宣言』の練り上げ過程におけるマルクス，エンゲルス，シャッパーのそれぞれの役割については，良知力『マルクスと批判者群像』(平

判。この会議で同盟は分裂。中央委員会の多数派はマルクスとエンゲルスを支持し，同盟の解体を避け，同盟の諸原則・政策・存立を維持するため，中央委員会をロンドンからケルンに移し，ケルン地区に新しい中央委員会を結成することを委任する決議を採択する。

他方，中央委員会少数派のヴィリッヒ＝シャッパー派はロンドンで独自の中央委員会をもつ別個の分離派同盟をつくり，マルクス・エンゲルス派中央委員会のメンバーを除名するとともに，ロンドンのドイツ人労働者教育協会などに働きかけをおこなう。９月17日，ロンドンのドイツ人労働者教育協会の多数がヴィリッヒ＝シャッパー側についたので，マルクス，エンゲルスらは同協会から脱退する。９月28日頃，共産主義者同盟ケルン地区委員会は中央委員会の任務を引き受けることに暫定的に同意したので，ヴィリッヒ＝シャッパー派はドイツその他の同盟所在国で足場を築くことができずに終わる。

そして11月11日にはマルクス，エンゲルスの指導する同盟ロンドン地区，ケルンの同盟中央委員会も分離派同盟のヴィリッヒ，シャッパーら指導的活動家を同盟から除名を決定，そのことの同盟全体への報告を提案するにいたる。

翌1851年，事はケルン共産党裁判にまで発展する。まず２月24日，ヴィリッヒ，シャッパーが司会をつとめルイ・ブランが加わった２月革命１周年記念を祝う「平等者の宴会」がロンドンで開かれたが，司会者らがルイ・ブラン，ルドリュ・ロランと臨時政府の裏切りを告発したL・A・ブランキの「乾杯の辞」を握り潰したので，３月３–４日頃，マルクス，エンゲルスはドイツ語と英語に翻訳して公表，ドイツとイギリスで流布された。

だが，ヴィリッヒ，シャッパーの分離派同盟は自らの保管文書をプロイセン警察が盗み出す便宜をはかったところから，５月24日頃から28日までの間，マルクスはケルンの同盟の指導的党員ノートユング，H・ベッカーらが逮捕され大逆罪で起訴されたという報告を受ける。また９月にはマルクス，エンゲルスはヴィリッヒ＝シャッパー派が即時に蜂起を組織しようという陰謀的・冒険主義的戦術を奇貨としてフランスとプロイセンの警察がプロイセン警察のスパイ，シェルヴァルを挑発者として送り込んで独仏陰謀としてでっち上げた，いわゆる独仏陰謀事件でヴィリッヒ＝シャッパー派のパリ班員が逮捕されたことを知る。そして12月１日に，マルクスはケルンで逮捕された同盟員への予審が引き延ばされていることについて，プロイセン司法省に抗議の手紙を書き，さらに抗議運動を組織しようとするが，実らない。

1852年はマルクス＝エンゲルス派がヴィリッヒ＝シャッパー派より優位にたつも，ケルン共

凡社，1971年．平凡社ライブラリー，2009年）が今日においても必読である。また良知力編『資料ドイツ初期社会主義　義人同盟とヘーゲル左派』（平凡社，1974年）にはシュタムヴィッツ／シャッパー／モルの「イギリスにおける社会組織の進歩」，シャッパー「プロレタリア」が収録されている。

ただし，注１），３）を通じていえることは，紙数の限定があるとしても『全集』第７巻の「人名索引」においても，『新マルクス学事典』においてもヴィリッヒ，シャッパーの「兵営共産主義」への言及は欠如している。

産党裁判の終結とともに共産主義者同盟が解体した年となる。すなわち１月半ば，ロンドンでヴィリッヒ＝シャッパー派に反対の立場をとるドイツ人労働者教育協会が創立される。ヴィリッヒ，シャッパー派への痛打である。他方，１月28日，マルクス，エンゲルスはケルンの被告の裁判の延期に対する抗議文をイギリスの新聞『ザ・タイムス』と『ザ・デイリー・ニューズ』に発表しようと試みるが，黙殺される。

２月19日頃，マルクスはプロイセン警察の手先であることが明らかになったＷ・ヒルシュの除名を提案，同盟のロンドン地区の正式会合はこれを決定，同時に同盟の会場と会合日を変更する決議がなされる。３月３日，マルクスは独仏陰謀事件で告発されているヴィリッヒ＝シャッパー派の一員がマルクス一味の手先であるという『ケルン新聞』の主張を反駁する声明書をケルン新聞に送る。声明は３月６日付の『ケルン新聞』に掲載される。４月30日，マルクスはエンゲルス宛の手紙で共同してドイツ人小ブルジョア亡命者の指導者について数篇の「人物論」パンフレット『亡命者偉人伝』を書くという計画を伝え，ハンガリーからの亡命者のバンジャがこの著作をドイツの出版社に刊行させるよう努力する予定と書く（後に判明したが，バンジャは警察の手先だった）。５月，マルクス，エンゲルス，論難書『亡命者偉人伝』のために多くの材料を集めるが，なおドロンケ，Ｗ・ヴォルフ，クルース，フライリヒラート，ヴァイデセイアーその他にこれら亡命指導者の伝記資料を送ってくれるよう依頼する。５月末から６月後半まで，マルクスはマンチェスターのエンゲルスを訪問し，ともに，ヴィリッヒの言動を「兵営共産主義」と規定した『亡命者偉人伝』を執筆する。６月25日頃から28日までに，マルクスはマンチェスターから戻って『亡命者偉人伝』を清書させ，清書原稿をバンジャに送る。

マルクス，エンゲルスは10月４日にケルンで開始された共産主義者同盟委員に対する陪審裁判ケルン共産党裁判を入念に追及し，被告の弁護士シュナイダー２世，ホントハイムを援助して，プロイセン政治警察の長官シュティーバーの文書変造・文書偽造・偽証を法廷で暴露するために友人らとともに全力を注ぎ，弁護材料をいろいろな方法でケルンに送る。

10月23日，マルクスがケルン共産党裁判の終了後，エンゲルスと共同してプロイセン政府のやり方を暴露するために，公衆に「真相解明のために」パンフレットの形で公表しようと提案。10月末から12月初めまでに，マルクスはプロイセン絶対主義政府の傾向裁判・階級裁判弾劾の書『ケルン共産党裁判の真相』を執筆する。11月12日以後，マルクス，エンゲルスはケルンの共産主義者に対する陪審員の評決，すなわち７人は３年ないし６年の懲役刑，４人だけが無罪という評決を新聞で知る。

11月17日，共産主義者同盟の会議で，マルクスが同盟はヨーロッパの反動勢力側からの攻撃，および同盟の有力な党員の逮捕の結果として事実上，存在しなくなったという理由で同盟解散の動議を提出，採択される。

11月20日，マルクス，エンゲルス『モーニング・アドヴァタイザー』編集部に「最近のケル

ン裁判に関する最後の声明」を送る。マルクス，エンゲルスの他，フライリヒラート，Ｗ・ヴォルフが署名したこの声明は11月29日付の同紙に掲載される。

11月末から12月までに，プロイセン警察本部は，マルクスがケルン共産党裁判でのプロイセン政府の卑劣なやり方を暴露するためのパンフレットの出版を企てていることを知り，ベルギー警察にも没収措置をとるよう要請する。

12月３日，マルクスはバンジャ宛の手紙で『亡命者偉人伝』の出版が長期間延引していることの理由の弁明を要求する。

12月７日，マルクスはケルンで判決を受けたプロレタリアートの代表者とその家族の救援の檄をアメリカのクルースに送り，救援委員会の組織を提案する。

マルクス，エンゲルス，フライリヒラート，Ｗ・ヴォルフ，Ｆ・ヴォルフ，リープクネヒト，ドロンケ，Ａ・ジョーンズ，Ｊ・Ｇ・エッカリウス，Ｇ・ロヒナー，Ｋ・プフェンダー，Ｍ・ピーパーその他の署名入りの声明が1853年１月，『ベレトリスティッシェス・ジュルナール・ウント・ニューヨーカー・クリミナールツッァイトゥング』に掲載される。

12月27日以後，マルクスは，バンジャがプロイセン警察と連絡があり『亡命者偉人伝』の清書原稿はおそらく警察の手に渡ったという情報を得る。

1853年はアメリカの地にて『ケルン共産党裁判の真相』をめぐってマルクス＝エンゲルス派とヴィリッヒとの論戦が繰り広げられるが，ヴィリッヒの論難を逐一，論駁した『気高い意識（こころ）の騎士』の刊行をもって分派闘争の後衛戦が終わる。

まず１月後半，マルクスの『ケルン共産党裁判の真相』がバーゼルで出版される。

３月９日，マルクスはバーゼルで出版されドイツ向けに発送予定だった『ケルン共産党裁判の真相』がスイスとバーデンとの国境ヴァイル村で警察に全部数（2000部）が没収されたことを知る。

３月18日，マルクスは論説「コシュートとマッツイーニ――プロイセンの警察――オーストリア＝プロイセン通商条約――『タイムス』と亡命」を書き，そのなかで『ケルン共産党裁判の真相』の全部数が押収され廃棄がされたことを報告する。この論説は４月４日付『ニューヨーク・デイリー・トリンビューン』に掲載される。

４月９日，マルクスは，同盟を除名されたヒルシュの『密偵政治の犠牲者，ウィルヘルム・ヒルシュの弁明書』がヴィリッヒによって印刷されることをクルースから聞いて，反論論説「ヒルシュの告白」(『全集』第９巻所収）を書く。マルクスはヴィリッヒとヒルシュの協力関係を暴露するとともにバンジャの正体をあばく。この反論論説は５月５日付『ベレトリスティッシェス・ジュルナール・ウント・ニューヨーカー・クリミナール‐ツァイトゥング』に掲載される。

４月24日頃，『ケルン共産党裁判の真相』がボストンの『ノイ・エングランド・ツァィトゥング』によって小冊子として出版される。

５月20日，マルクス，エンゲルスとその支持者たちの52年12月７日の檄に応じて，アメリカで集められたカンパ＝救援金をヴァイデマイアーから受け取ったエンゲルスは，フライリヒラート（ケルンで有罪判決を受けた共産主義者同盟員とその家族のための救援金の会計を担当していた）に回送するため，マルクスに送る。

５月31日頃，エンゲルス，ボストンで出版された『ケルン共産党裁判の真相』をアメリカから受け取る。エンゲルスはマンチェスターで配布するための部数を除いた残りをマルクスに送る。

５月末から６月初めまで，マルクスとエンゲルスは，ヴァイデマイアーとクルースからアメリカに移住したのちも『ケルン共産党裁判の真相』の発行に関連して何度もマルクスを攻撃していたヴィリッヒ対ヴァイデマイアー，クルースとのアメリカのドイツ語新聞での論戦について知らせを受ける。

11月21日頃，マルクスは，クルースを通じて『ケルン共産党裁判の真相』を攻撃したヴィリッヒの論説が掲載されている『ベレトリスティッシェス・ジュルナール・ウント・ニューヨーカー・クリミナール‐ツァイトゥング』の号を受け取る。

11月21日頃から28日までに，マルクスは，労働運動内の小ブルジョア分子のセクト主義的・冒険主義的戦術に固執するヴィリッヒに対する論駁書『気高い意識の騎士』を書き始める。

11月22日頃，エンゲルス，ヴィリッヒのマルクス攻撃論説の原文をマルクスから受け取る。マルクスの依頼でエンゲルスは声明を書き，ヴィリッヒの妄想を暴露する。マルクスはこの声明を『気高い意識の騎士』に取り入れる。

11月25日，ヴァイデマイアー，クルース，ヤコービらは，マルクスから送られてきた資料を利用し，『ベレトリスティッシェス・ジュルナール・ウント・ニューヨーカー‐クリミナール‐ツァイトゥング』に共同声明を発表し，マルクスに対するヴィリッヒの攻撃を退ける。

11月29日，マルクスは『気高い意識の騎士』をアメリカで出版するため，クルースに当てて発送する。

この論難書はヴァイデマイアーによって1854年１月半ばにニューヨークで出版される。

１月27日，マルクス，アメリカから刊行された『気高い意識の騎士』を受け取る。

以上，ヴィリッヒ＝シャッパー派に対するマルクス，エンゲルスの党内闘争・分派闘争の進め方をフォローしてきたが，この闘争が組織的闘争としてきわめて公明正大におこなわれたこと，あくまで事実の徹底的な博捜にもとづいて思想闘争＝イデオロギー闘争が展開されたこと，とりわけケルン共産党裁判では「国家における第三の権力」(「評論　1850年５月-10月」第７巻，458ページ）である「世論」の獲得のために機会をとらえて広くブルジョア・ジャーナリズムの利用をはかっていることなど，的を定めてプロイセン政府を追い詰める裁判闘争戦術が駆使されていることを知りうる。

ヴィリッヒ＝シャッパー派とは何であったのか

それではヴィリッヒ＝シャッパー派と袂を分かった決定点は何であったであろうか。

1956年に初めて原文が発表された「1850年９月15日の中央委員会決議」で，マルクスは，その「原則的対立」を以下のように述べている。

「個人的対立だけでなく，原則的対立も協会のなかにすら現われている。ほかならぬ『来るべき革命におけるドイツ・プロレタリアートの立場』という問題についての最近の討論では，この前の前の回状（「1850年３月の中央委員会の同盟員へ呼びかけ」――引用者）に，それどころか『共産党宣言』にすらまっこうから対立する意見が，中央委員会の少数派に属する人たちによって述べられた。『宣言』の普遍的な見解の代わりに，ドイツの民族的見解が主張され，ドイツの手工業者の国民感情にこびへつらっている。『宣言』の唯物論的見地の代わりに，観念論的見地が主張されている。現実の諸関係ではなくて意志が革命の眼目だと主張されている。われわれは労働者に，こう言っている，『諸君は諸関係を変え，諸君自身が支配能力をもつようになるために，なお15年，20年，50年間というもの，内乱を通らなければならない』と。ところが諸君は，こう言っている。『われわれはただちに政権をにぎらなければならない。それができなければ寝てしまってもかまわない』と。民主主義者が『人民』という言葉をたんなる空文句として使ってきたように，いまでは『プロレタリアート』という言葉がたんなる空文句として使われている。この空文句を実行するためには，すべての小ブルジョアをプロレタリアと宣言し，したがって実際には［de facto］プロレタリアではなく小ブルジョアを代表しなければならなくなるであろう。真の革命的発展を，革命という空文句とすりかえなければならなくなるであろう。［……］彼らがいま述べている見解は反共産主義的なもの，せいぜいのところ社会＝民主主義的なものと呼んでもさしつかえない」(第８巻，583-584ページ)。

『宣言』の普遍的見地 vs ドイツの民族的見解，『宣言』の唯物論的見地 vs 観念論的見地，現実の諸関係 vs 意志，小ブルジョアのプロレタリア化＝プロレタリアの小ブルジョア化，真の革命的発展 vs 革命という空文句，共産主義的なもの vs 社会＝民主主義的なもの。相容れない180度の両極的対立である。

それではこのヴィリッヒ＝シャッパー派の全体的立場は，彼らにどのような政治的・政策的傾向をとらせることになったであろうか。

これについては1851年６月21日，『ドレスドナー・ジュルナール・ウント・アンツァイガー』に公表された「ケルン中央委員会の同盟員への呼びかけ」が明らかにしているヴィリッヒ＝シャッパー派の一般原則が参看されるべきであろう。すなわち，そこでは，こういわれている。

「同盟は文筆家分子をすべて排除すべきである，同盟はもっぱら手工業者と工場労働者との統合体であって，意志さえしっかりしていれば，彼らは，次の革命のさいにただちに支配権を獲得して，社会の共産主義的改造を遂行できるだろう，というのである。これは，プロレタリア党があの昔の一般的な禁欲主義の立場（『宣言』Ⅲ［「社会主義的，および共産主義的文献

――引用者］第３節を参照せよ）と粗野な平等主義とに逆もどりしなければならないということをはっきり言明したものにほかならなかった。ブルジョア社会のさまざまな政治的および経済的学説に対して，プロレタリア階級闘争の一般的原理を対置することが問題であった初期のプロレタリア運動の時代であったなら，こうした立場もある正当性をもっていたであろう。ところが，いまはこの否定的な態度は，もはや何らかのブルジョア的社会主義に向けられているのではなかった。それは，1848年の『共産党宣言』と党の政策を詳しく展開した本年の第一の（３月の――引用者）『中央委員会の同盟員への呼びかけ』の筆者たちを非難しているのであった。否，それは，そうすることで，『宣言』と党の政策そのものを非難しているのであった。つまり『宣言』と『呼びかけ』の述べるところでは，プロレタリアートが，いったん自己の階級的地位を自覚したあとで，この地位の内部で旧社会のすべての教養要素を吸収し，こうして理論的には共産主義革命の運動を認識するようになり，また実践的には，これらの条件の発展をたどって，さまざまな国民的諸党派の闘争のなかで自己の政治的および経済的支配を闘いとるということがプロレタリア運動の発展行程であるが――他方，この新しく，また古い見地は，理論活動はもう一切いらぬと言明し，すべての文筆活動を敵視しており，現在の発展を基盤として，ことに新しいドイツ革命を基盤として運動の終局目標を達成できると考えている。だから，一見『純粋プロレタリアート』の利益をきわめて排他的に代表しているかのようなこの連中がフランス人，ポーランド人，ハンガリー人と共同して『民主主義＝社会主義委員会』という看板で発表した彼らの最新の宣言では，たんに革命という文句をがなりたてているにすぎず，自ら小ブルジョア的な社会＝民主主義的共和国の前衛戦士と名乗っているのは，実際，まったく当然なことである。というのは，このようにしてプロレタリアートは，運動の時期にも，その以前の非政治的な立場に引き戻されるだろうからである。プロレタリアートは，またしても他の一階級の利益のために闘争に招集され，あとでこの勝利の果実を欺き取られることになろう」(第７巻，572–573ページ)。

この言表は明らかに前掲「９月15日の中央委員会決議」を踏まえたものであるが，「文筆家分子をすべて排除すべきである」という主張が「初期プロレタリア運動の時代の古い見地」であること，「旧社会のすべての教養要素を吸収し，理論的に共産主義的革命の運動を認識する」ことの代わりに「理論活動はもう一切いらぬと言明し，すべての文筆活動を敵視」することはプロレタリアートを「非政治的な立場に引き戻す」ことであるという観察は，ヴィリッヒ＝シャッパー派がほかならぬバクーニン主義の先駆であることを洞察したものとして傾聴に値する。

これに関連してマルクスが『ケルン共産党裁判の真相』の「６　ヴィリッヒ＝シャッパー派」の項において組織論としてこの一派の陰謀的秘密結社を否定していることもバクーニン主義との関連で看過しえないところである。

マルクス，エンゲルスの陰謀的秘密結社の否定は，1848年革命の総括のために発刊された『新ライン新聞　政治経済評論』(1850年４月，第４号）の書評中の「二　市民コシディエール

配下の前警備隊長Ａ・シュニュ著『陰謀家』――秘密結社，コシディエール配下の警視庁，義勇兵団，パリ，1850年．リュシアン・ド・ラ・オッド著『1848年２月における共和国の誕生』，パリ，1850年」においてすでに表白されている[4)]。

すなわちマルクスは陰謀団体の指導者たちと労働者たちのあいだの中間層をなす「職業的陰謀家」の志向と役割を，こう描いている

「職業的陰謀家の本業は，まさに革命的発展過程を先回りし，それを人為的に駆りたてて危機を醸成し，革命の条件も存在しないのに即席の革命をつくりだすことにある。彼らにとっては，革命の唯一の条件は，彼らの陰謀が十分に組織されていることである。彼らは革命の錬金術師で，昔の錬金術師の固定観念の思想的錯乱と狭さを完全にともにしている。彼らは，革命的奇跡をおこなうはずの考案に没頭する。焼夷弾，魔術的な働きをする破壊機械，合理的な根

４）ボブズボームも『反抗の原初形態』（E・ボブズボーム著・青木保編訳，中公新書，1971年・原題：Eric J. Hobsbawm, *Social Bandits and Primitive Rebels*, Free Press of Glencoe, 1959.）において，ド・ラ・オッド (De la Hodde) の *"Histoire de Societies Sechètes et du Parti Republicain"*, Paris, 1850. によってマルクスと同様，古典的なプロレタリア的秘密結社＝「儀礼的兄弟団」の構成と特質を，以下のように特徴づけている。

「古典的な儀礼的兄弟団は，全体的に，ド・ラ・オッドが，中産ないし上流階級の非雇用者的インテリと『無力な』その構成員とよぶ人びとによって構成されていた。兄弟団は，もう一つの別の，半分階級を脱しかかっていた集団――仮装や儀式を好む人びと――，つまり軍隊の士官などに強く訴えていた。これらの人びとによって代表される革命は，ある程度まで，革命の実現によって実際利益をうける民衆にとっては外部から課された人工的なものであった。このような大衆は，彼らの計画においてはほとんどなんの役割も果たしていなかった」(187–188ページ)。

そしてボブズボームは，このような「儀礼的兄弟団」と対比して「共産主義者同盟」の近代性を明らかにしている。

「亡命者（アウトロー）は，いみじくも，正義の連合（リーグ・オブ・ザ・ジャスト）(義人同盟－引用者）を生み出したが，それは，マルクスとエンゲルスの影響のもとで，共産主義者連合（リーグ・オブ・ザ・コミュニスト）(共産主義者同盟－引用者）となり，その発足のために有名な『共産党宣言（マニュフェスト）』が書かれることになる。この共産主義者連合は，もはや古い型の兄弟団ではない。マルクスは，兄弟団をはっきりと嫌っていたが，――彼はつねにいかなる兄弟団に参加することも拒絶した――この共産主義者連合の出現を待っていた。そして，とくにこの運動の原則として迷信的な権威至上主義的なものいっさいを取り除くことを明記したのである。この新しい団体は，民主的であるとともに中央集権的であったが，その運動員はみな選挙で選ばれ，場合によっては，罷免を受けることもあった。それの掲げる実際上の目的からみても，それはまったく近代的な革命組織であった。こうして，われわれはここに，亡命者のつくった擬似カルボナリズムから組織的に完全な合理主義へのかなり完璧といえる移行の例をみることができるのである。この移行の全過程は，1834年から1846年のあいだに完遂された」(同，185–186ページ)。

なお，共産主義者同盟の近代性を同盟諸規約の検討を通じて明らかにしているものに黒滝正昭・服部文男「『共産主義者同盟　文書および資料』の意義について」(季刊『科学と思想』第51号，1984年)，加藤哲郎『社会主義と組織原理　１』(窓社，1989年）がある。

付言すると，前者『文書および資料』第１巻にもとづいてマルクス，エンゲルスの朋友ワイデマイアーが「ヴィリッヒを『兵営共産主義』の水準を出ていない」と指摘している点（489–490ページ）を紹介している。また後者は同盟の組織原理を「陰謀的集権」から「集権的平等」への転換とみている。

拠をもたなければもたないほど，ますます奇跡的な，意表外な影響を及ぼすべき暴動，こういうふうのものである。こういう空想計画の作成に没頭している彼らは，現存政府の打倒という当面の目的のほかには，どんな目的ももっておらず，労働者に彼らの階級利害を自覚させるという，より理論的な仕事をひどく軽蔑する。燕尾服人種［habits noirs］，つまり，運動のこの理論的方面を代表する，多少とも教養ある人々に対して，彼らがプロレタリア的というより平民的な憤懣をいだいているのは，このためである。」（第７巻，280ページ）。

この特徴づけは，まさにヴィリッヒ＝シャッパー派の振舞いを先取りしているといえる。

そしてさらに職業的陰謀家と取締り当局＝警察との不即不離・持ちつ持たれつの相互関係をも，以下のように剔抉している。

「陰謀家たちの生活の主要な特徴は，警察との闘争である。彼らの警察に対する関係は，泥棒や売春婦の警察に対する関係とまったく同じである。警察は陰謀団体を大目にみる。それも，一つの必然悪として大目にみるというだけではない。警察が陰謀団体を大目にみるのは，社会でもっとも暴力的な革命分子が集まる，監視しやすい中心としてであり，フランスでは警察そのものと同じくらい必要な統治手段となっている暴動の製造工場としてであり，最後に，警察自身の政治的密偵の徴募所としてである。もっとも有能な泥棒刑事であるヴィドックとその一党が，高等，下等，様々ないかさま師，つまり盗賊や詐欺師［escrocs］やいかさま破産者のなかから拾い上げられ，またしばしば元の仕事にまいもどってゆくのとまったく同じに，下級の政治警察は職業的陰謀家のなかから徴募される。陰謀家たちはたえず警察と接触を保っており，しょっちゅう警察と衝突する。彼らが密偵を追いかければ，密偵も彼らを追いかける。スパイは彼らの本業の一つである。だから，貧困や投獄，脅迫や約束に誘導されて，職業的陰謀家からお雇いの警察スパイへの小飛躍が，しょっちゅう起こるのは不思議ではない。そのために，陰謀団体のなかにはてしない猜疑の体系が生じ，それが団員を完全に盲目にして，もっとも優れた人物を密偵とみなしたり，本当の密偵をもっとも信頼すべき人物とみなしたりさせるのである。陰謀家のなかから徴募されたこういうスパイが，たいてい警察をだませるだろうと本気に考えて警察と掛りあいをもつのだということ，また，彼らがしばらくは二股膏薬をうまくつとめていくが，そのうち，その第一歩から生まれてくる結果にだんだんに落ちこんでゆくのだということ，警察が本当に彼らにだまされる場合もしばしばあることは，明らかである。とにかく，こういう陰謀家が警察のわなに陥るかどうかは，純然たる偶然的事情にかかっており，また志操堅固の質的な差異というより，むしろその量的な差異にかかっている」（同，280–281ページ）。

これまた共産主義者同盟の分裂期に同盟各派に潜入したプロイセン警察のスパイ，シェルヴァルやヒルシュの出現を予期しているかの如くである。

そしてマルクスはプロレタリア出身の職業的陰謀家たちが，フランスの２月革命後，共和派警視総監コシデイエールのもとで「警視庁内の山岳派」として警視庁を革命の城砦にして革命

を前進させようと目論んだとしても，所詮，甲斐のないことで，革命は全プロレタリアートによってのみ遂行されうるとする。

「これらの職業的陰謀家たち，彼らの諸支部のもっとも激烈な人びと，たいていは自身古くからの陰謀家であったプロレタリア出身の政治犯たち［détenus politiques］，この人びとにわれわれが２月革命後に再会したときには，彼らは，警視庁内の山岳党を構成していた。だが，この仲間全体の中核となっていたのは，陰謀家たちであった。［……］国民議会の山岳党が昔の山岳党のもじりであって，その無能力によって，今日では1793年の古い革命的伝統だけではもはや十分でないことをまざまざと証明したように昔のサンキュロットの再現である警視庁内の山岳党は，近代の革命では，プロレタリアートのこの部分もまたもはや十分でなく，全プロレタリアートだけが革命を遂行しうることを証明したのであった」(同，282ページ)。

＊フランス革命当時の革命的プロレタリアートと小ブルジョア。彼らは，当時の正規の服装である半ズボン［culottes］をはかなかった」。

この引用で注目されるのは，マルクスは近代革命――フランスでは共和制革命の社会主義革命への転化にあっては，古典的なフランス革命における1793年の革命的伝統――ロベスピエール，サン・ジェストらを指導者としサンキュロット民衆に支えられた山岳党＝ジャコバン党の恐怖政治を1848年の国民議会の山岳派や警視庁の山岳派が再現しようとしても「もはや十分でない」として「全プロレタリアートだけが遂行しうる」，いわゆる多数者革命の見地にたっていることである。世上，マルクス主義の革命論がフランス革命時のジャコバン党の恐怖政治と同一視する向きがあるだけにリマークすべき指摘である。

それでは『ケルン共産党裁判の真相』「６ ヴィリッヒ＝シャッパー派」の項が何を述べているかという先の論点に立ち戻ろう・

それはこうである。

「『共産主義者同盟』は陰謀的な結社ではなくて，プロレタリア党の組織を秘密のうちに実現しようとする結社であった。なぜなら，ドイツのプロレタリアートが火と水［igni et aqua］，つまり著作・言論・結社を公けには禁止されているからである。このような結社が陰謀を企てるとすれば，それは蒸気と電気が現状［Status quo］に対して陰謀を企てるという意味でしか起こらないことである。

将来の政府党の組織ではなくて，将来の反政府党の組織を目的とする秘密結社が，一方では自分自身のくだらなさを陰謀という観劇用のマントのもとに隠し，他方では自分の偏狭な名誉心を次の革命がやってくるときに満足させようと思っているが，何をおいてもさしあたり大物らしく見せかけ，デマゴギーの獲物の分け前にあずかり，民主党の香具師に歓迎されたいと思っている連中には，あまり魅力のなかったことは明らかである。

そこで共産主義者同盟から一分派が分離した，あるいは，こう言ってよければ排泄された。この一派は，現実の陰謀ではないとしても，陰謀の見せかけを要求し，したがって民主党の当

代の人気者たちと直接同盟することを要求したヴィリッヒ＝シャッパー派がそれである」(第８巻，449ページ)。

こうしてマルクスはヴィリッヒ＝シャッパー派の「分離」＝「排泄」の心情的根拠を共産主義者同盟が「一方では自分自身のくだらなさを陰謀という観劇用マントのもとに隠し，他方では自分の偏狭な名誉心を次の革命がやってくるときに満足させようと思っているが，何をおいてもさし当たり大物らしく見せかけ，デマゴギーの獲物の分け前にあずかり，民主党の香具師に歓迎されたいと思っている連中」にとって，「魅力のなかったこと」に求めている。

なお，ヴィリッヒの「偏狭な名誉心」がヴィリッヒを個人的な軍事的独裁の采配者にまで導いていったことに関しては，すでにフランスの２月革命の期間中の1848年11月にヴィリッヒが編成したブザンソン・ドイツ人部隊の実情を述べた同月14日付のＪ・Ｐ・ベッカー宛てのフランス・ナンシー部隊書記Ｂの手紙が明らかにしている。やや長きにわたるが，ヴィリッヒの人格的個性をうかがうために引用しておこう。

「ナンシーのドイツ人部隊から

ドイツ人武装団体「自助団」[“Hilf Dir”！] 団長

ビール在住の市民ヨハン・フィリップ・ベッカーへ

全ドイツ人亡命共和主義者の選出代表たるあなたに，

われわれはここに『ナンシー在住ドイツ人部隊』と名のるドイツ人亡命者の部隊がナンシーで結成されたことを通告する。

当地の部隊を形成する亡命者は，一部は以前ヴズル部隊をつくっていた亡命者で，他の一部はブザンソン部隊の一部をなしていた当地の亡命者である。ところで，あとにあげた一部がブザンソン部隊から脱退したについては，純然たる民主的な原因が存在するのである。

というのは，ヴィリッヒは彼のやるすべての事柄について非常に稀にしか部隊に相談しなかったのである。こうしてブザンソン部隊の根本原則も一般にはかられ決定されることなく，部隊の同意なしに，ヴィリッヒによって天降り式に［a priori 先天的に］与えられ，試行された。

さらにヴィリッヒは，イェラチッチやヴィンディッシュグレーツのような連中にはふさわしくてもけっして共和主義者にはふさわしくないような数多くの命令を出して，その専制的な性格の経験的な［a posteriori］証拠をもわれわれに示したのである。

ヴィリッヒは，部隊を去ろうとしたシェーンという名の一員から，部隊の貯金で彼のために調達された新しい靴を剥ぎとるように命じた。この貯金は主としてフランスから補助金として毎日支払われている一人当たり10スーの金にもとづくもので，シェーンもその貯金には分け前を持っていることを，ヴィリッヒは考慮しなかったのだ。……シェーンは自分の靴をもっていこうとした。しかしヴィリッヒはそれを彼から取り上げさせてしまった。

ヴィリッヒは部隊の若干の有能なメンバーを点呼や教練のときの失策，(夜の) 帰隊の遅刻，小さいいさかいといったちっぽけなことのために，ブザンソン部隊に相談することなしに追放

した。しかも，そのさい彼らに次のように宣告しているのだ。アフリカに行きたまえ。フランスに留まることはけっして許されないからだ。もしアフリカに行かないなら，わしは君たちを引き渡させる，しかもドイツに引き渡させるぞ，わしはフランス政府からその全権を委ねられているのだから，と。ところで全権うんぬんの件は，あとで問い合わせてみると，ブザンソンの県庁がそれは嘘だと言明したのだ。ヴィリッヒはほとんど毎日点呼のさいに声明した。誰でも気にいらぬものは出てゆきたければ出てゆくがよい，早ければ早いほどいい。アフリカに行くがいい，などなど，と。さらに彼は一度，一般的なかたちで次のような嚇しを口に出したことがある。誰でも彼の命令に反抗するものは，アフリカに行きたまえ，さもなければわしがドイツに引き渡させるぞ，と。で，その結果，前に述べた県庁への照会となったのである。このように毎日脅迫されていたために，多くの連中はブザンソンでの生活に嫌気がさしてしまった。ここでは，彼らが言ったように，わずかばかりのあてがい扶持を足元の地面に投げてもらっているのだった。彼らは言った。奴隷になるつもりなら，ロシアにでも行ったらよいのだ，でなけりゃ，ドイツで何もおっぱじめなかったらよかったんだ，と。もうたくさんだ，ヴィリッヒと大衝突をやらかすことなしには，もはやこれ以上ブザンソンに我慢していることはどうしてもできないと，彼らは言明した。そこで，彼らは立ち去った。しかし，当時は，彼らを受け入れることのできるような部隊は他のどこにもなかったし，一日10スーでは暮らしてゆけなかったので，アフリカにでも雇われてゆくよりほかには仕方がなかったし，実際にそうしたのである。こうしてヴィリッヒは30人もの勇敢な市民を絶望に追いやった。これらの勢力が永久に祖国から失われたことについては彼に責任があるのである。

さらにヴィリッヒは，点呼のさいにはいつも古参の者を誉め，新参をけなすという馬鹿なことをやって，しょっちゅう争いを引きおこした。実際，ヴィリッヒはある時などは，点呼のさいに，こう言明さえした。プロイセン人は，頭・心・身体において，言いかえれば彼の表現によると，肉体的・道徳的ならびに知的能力において南ドイツ人よりはるかに優れている。その代わりに，南ドイツ人はのんびりしている，と。じつは，彼は，愚鈍だ，と言いたかったのだが，そう言いきるだけの勇気はさすがになかったのである。そのために，ヴィリッヒは，南ドイツ人全部を，そして彼らは大多数を占めていたのだが，おそろしく憤慨させてしまった。最後に，一等乱暴なことが起こった。

二週間前に第七中隊が，ヴィリッヒが勝手に兵営から追放したバロッジョという隊員に，もう一晩，営内での宿泊を許すと約束し，ヴィリッヒの禁止にそむいて彼を自分らの部屋に泊め，ヴィリッヒの支持者たる狂信的な仕立屋たちに対して彼を擁護したときに，ヴィリッヒは，縄をもってこい，そして謀反人どもを縛ってしまえ，と命令した。縄は本当に持ってこられた。しかし，命令を完全に実行させるには，ヴィリッヒにその意志は十分あったのだが，彼の力が足りなかった。……以上が彼らが離隊した理由である。

ヴィリッヒを非難するために，われわれはここにこのことを書いたのではない。なぜなら，

ヴィリッヒの性格と意志は善良であり，われわれの多くは彼を尊敬している。しかし，彼がその目的に達しようとするそのやり方，彼の用いる手段がわれわれ全部の気に入ったわけではなかったのである。ヴィリッヒに悪気はないのだ。しかし彼は自分を智恵者，最後の論拠［ultimo ratio］と思い，たとえささいなことにおいても，彼に反抗する人間をば，誰でも馬鹿か裏切者と思い込むのである。つまり，ヴィリッヒは，自分自身の意見のほかにはいっさい他の意見を認めないのだ。彼は精神的貴族で専制君主なのだ。彼は何かをいいと思ったら，そのときには手段を選ぶのにあまり恐れはばからないのだ。しかし，そのことはもうこれで十分だ。われわれはいまやヴィリッヒの人柄を知っている。われわれは彼の長所も短所も知っている。だから，われわれはもはやブザンソンには留まらないのだ。そのうえ，誰でもブザンソンを立ち去るときには，自分らはヴィリッヒのもとからは立ち去るが，しかし，けっしてドイツ武装団体『自助団』から脱退するのではない，と言明してきた。

同様にヴズルの連中も……われわれは高い敬意を確言して，筆をおく。ナンシー部隊の兄弟の挨拶と握手で。

1848年11月13日の総会で採択。

ナンシー，1848年11月14日

部隊を代表し，その委託により 書記B……」(『フォークト君』「４ テヒヨーの手紙」第14巻，422–425ページ)。

みられるように自己を「精神的貴族」とみなす倨傲から生ずる偏狭な個人崇拝をもって命令に従わない兵士を気随気ままに，ときには暴力的に追放し，「手段を選ぶのに恐れはばからない」粗暴な専制君主的・独裁者的性格が活写されている。

つぎに分裂後のヴィリッヒの軍事的・政治的独裁のもとでの革命戦術に関しては，1853年11月11日付のW・シュテフェンからマルクス宛への手紙において嘲弄を交えて，以下のように紹介されている。

「アウグスト・ヴィリッヒからH・H・ベッカーにきたこれらの手紙を通読すると，じっさい，そこには滑稽きわまる奇妙な（プロイセン王国のぴったりした表現を使うと），日々命令があった。そのなかで，かの偉大な元帥兼社会の救世主はイギリスからの次のような命令を発しているのだ。いわく，ケルンを占領せよ，私有財産を没収せよ，巧みに組織された軍事的独裁を樹立せよ，軍事的＝社会的法典を施行せよ，一つを除きすべての新聞を禁止せよ，その一つは，指定通りの考え方，ならびに行為の仕方がどうあるべきかについての命令を日々伝えるものとする，と。他に細かいことがまだどっさりある。ヴィリッヒは親切にも約束している。もしもケルンとプロイセンのライン州での仕事が一部なされたら，自身乗りこんでゆき，羊と山羊をよりわけ，生けるものと死にたるものとを裁くであろう※と。ヴィリッヒの述べているところによると，彼の『簡単な草案は，もしも数人がイニシャティブをとったならば，容易に実現できただろうに』，そして『きわめて重要な結末』（誰にとってか？）『をあげたことだろ

うに』と」(『気高い意識の騎士』，第９巻，503ページ)。

※『新約聖書』「マタイ伝」第25章第31-46節，および「テモテ後書」第４章第１節を参照。

ここには軽妙な筆致でヴィリッヒの個人独裁のもとでの命令主義・行政的指令システムの萌芽が揶揄の対象とされている。

ヴィリッヒの兵営共産主義像

それではヴィリッヒの言動を「兵営共産主義」と規定した『亡命者偉人伝』はどういう運命を辿ったか。この『偉人伝』の刊行は，マルクス，エンゲルスの生前には日の目をみず，『全集』第８巻の注解（143）によれば，80年を経た1930年にはじめて刊行されるという変転を辿る。

「著者の生前には，この著作は発表されないままに終わった。マルクスとエンゲルスのもとに保存されていた原稿の副本は，のちにエドゥアルト・ベルンシュタインの手中にあったが，彼はその発表のために何らの措置もとらなかっただけでなく，1913年にマルクスとエンゲルスの往復書簡を出版したさいに，著作『亡命者偉人伝』に関係する個所をすべて念を入れて削除した。1924年にマルクスとエンゲルスの文献遺産を管理していたドイツ社会民主党文庫は，ベルンシュタインから原稿を受け取った。1930年にこの労作ははじめてモスクワのマルクス＝エンゲルス研究所によって『マルクス＝エンゲルス‐アルヒーフ』第５巻のなかにロシア語で発表された」(第８巻，616ページ)。

『亡命者偉人伝』はゴットフリート・キンケル，グスタフ・シュトルーヴェ，アーノルド・ルーゲ，カール・ハインツェンら1848年のドイツ革命の大立物の革命敗退後の亡命先における個人的功名心にかられたいさかい・いがみあいをユーモアをまじえた辛辣な筆致で風刺した行状記であるが，そこにヴィリッヒも一役を与えられる。ヴィリッヒはプファルツ―バーデン戦役でパルチザン隊長として登場したので，その役割はパルチザン隊長のそれである。といっても，その役割は平時のヴィリッヒ＝シャッパー派＝分離同盟の隊長であるが，その同盟で兵営共産主義が営まれているとみて，その様相を第「一三」部において，以下のように描出している[5)]。

「何よりも第一にヴィリッヒは，新しい部隊の基幹となるべき連隊幹部をまとめておき，たえず徴募下士を活動させなければならない。義勇兵の残りの者と一般亡命者中の庶民からなる幹部は，政府の費用であろうと（たとえばブザンソンのように）または，何か別のやり方であろうと，とにかく兵営に入れられる（einkaserniert)。兵営生活の観念的聖別も欠けてはならない。この聖別は兵営共産主義（Kasernenkommunismus）によって更新され，これによっ

5）『全集』第８巻の注解（143）によれば「原稿の第「一」部（原典235-253ページ）はドロンケの筆跡であり，残りはエンゲルスの筆になっている」(同，616ページ）という。したがって，以下の引用部分もエンゲルスによる清書稿にもとづく。

て平凡な市民的活動への軽蔑にはより高い意義が生じる。ところでこの共産主義的兵営（kommunistishe Kaserne）は交戦条規に従うのではなく，道徳的権威と犠牲の命令にだけ従うのであるから，ときおり共同の金庫をめぐる殴りあいが起こらないわけにいかない。そういうときは，道徳的権威はかならずしも少々の損害で免れるというわけにはいかなかった。どこか最寄りに職人組合（Handwerkerverein）が見つかると，それは補給されるべき部隊の徴募機関として利用され，職人には現在の辛い仕事の補償として将来の放縦な生活と義勇兵らしい冒険との見通しがひらかれる。おそらく兵営がプロレタリアートの将来にとってもっている高度の原則的意義を考慮して，組合が貨幣を食料調達に供給するように手配することもあろう。組合でもそうであるように，兵営では説教と家父長的＝告げ口的な個人交際のやり方とは効き目がないわけではない。党人は平時にあっても不可欠の確信を失わない。そしてこれまではいつでも痛手をうけるたびに明日のために勝利を告げたように，こんどは，２週間以内にまさにそれが『始まる』であろうという道徳的確信と哲学的必然性をいつでも告げている。彼は敵に事を欠かないし，高貴な人には必ず高貴でない人が対立するのであるから，彼はこれらの者のうちに自分に対する猛烈な敵意を発見し，そして高貴でない連中が彼の当然な人気に対する憎しみからそうするのであり，彼を毒殺し刺殺したがっていると信じることになる。そこでは彼はいつでも枕の下に大型の短刀を隠すのである」（第８巻，315ページ）[6]。

6）兵営共産主義の概念をはじめて提起した『亡命者偉人伝』について，『全集』第８巻のソヴエト連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所の「序文」は，このパンフレットを，つぎのように位置づけている。

「この巻にのせたマルクスとエンゲルスの共同著作『亡命者偉人伝』は，筆者たちの存命中には陽の目を見なかったものであって，小ブルジョア民主主義派の指導者たち，まず第一に，ドイツにおけるその代表者たち――キンケル，ルーゲ，ハインツェン，シュトルーヴェ，その他――を批判したパンフットである。このパンフットのなかで，マルクスとエンゲルスは，すでに1848年の革命以前に彼らが始めた，さまざまな小ブルジョア的潮流のイデオロギーと戦術の暴露をつづけている。二人がそのさい追求した主要な目的は，プロレタリアートの思想的・戦術的立場の自主性と純潔とを守り，小ブルジョア的幻想と全体としての小ブルジョア・イデオロギーの有害な影響からプロレタリアートを保護することにあった。そのうえ，マルクスとエンゲルスのこのパンフレットは，小ブルジョア的指導者たちがプロレタリア的革命家に対してくわえていたおびただしい中傷的攻撃にたいする直接の回答となるはずであった。

政治的風刺のあらゆる文学的手法――論敵にたいする仮借ない嘲笑，批判さるべき現象のとくにいとうべき側面を鋭くとりだすこと――をみごとに駆使して書かれたパンフレット『亡命者偉人伝』は，ドイツの小市民とその政治的・文筆的代表者たちの真の欠陥をきびしくえぐりだしている。マルクスとエンゲルスは，真の芸術的表現力をもって，ドイツの小ブルジョア的亡命者の「偉人たち」の肖像を描いて，一つの画廊を構成している。二人は，これらの指導者の俗物的な精神世界の貧しさ，その哲学的・政治的見解の卑俗さと狭さ，政治上での彼らの極度の動揺性，小ブルジョアの特徴である極端から極端への豹変，卑屈なご機嫌とりと迎合から騒がしい無政府主義的えせ革命性への豹変を鮮やかに示している。マルクスとエンゲルスは，そのパンフレットのなかで，ドイツの小ブルジョア的指導者たちの亡命生活の日常をおおいかくしているカーテンを引き上げて，原則上の争いという仮面の

最寄りの職人組合を現在の辛い仕事の補償として将来の放縦な生活と義勇兵らしい冒険との見通しを示して部隊の徴募機関として利用する。説教と家父長的＝告げ口的な個人交際のやり方が幅を利かせる。痛手を受けるたびにまさにそれ＝蜂起が始まるであろうという道徳的確信と哲学的必然性を告げる。高貴な人と高貴でない人とが対立するので，高貴な人ヴィリッヒは敵に事を欠かない。そこでいつでも枕に下に大型の短刀を隠すそういう共産主義のモンスター，兵営共産主義も存在しうる。そこでマルクス，エンゲルスは唯物論的見地ではなく観念論的見地にたち，現実の諸関係ではなくて意志を革命の眼目とし，理論活動・文筆活動を敵視し，プロレタリアートを非政治的な立場に後退させる陰謀的秘密結社を兵営共産主義のプロトタイプ＝原型にし，それがライン州を支配するとすれば，ライン州をも兵営と化すヴィリッヒ主義の帰結を兵営共産主義にみているといってよいであろう。

そこでこうみてくると，兵営共産主義とは哲学的には観念論的主意主義，政治的には個人的な軍事的・政治的独裁，経済的にはフェライン―アソシエーションを自己の支配保持のための徴募機関たらしめ，組織的にはプロレタリア政党を陰謀的秘密結社に変質させるという性格的諸特徴をもつものと捉えることができよう。

レーニンは『マルクス＝エンゲルス往復書簡集』を激賞しているが，編者ベルンシュタインが『亡命者偉人伝』に関係する箇所をすべて削除しているとあっては，かつまた自身，直接に『亡命者偉人伝』を披読する機会がなかったとすれば，ヴィリッヒ主義・兵営共産主義に対する認識とそれにもとづく警戒心は何程か弱められたといえよう。

さて，「1850年９月15日の中央委員会決議」はマルクス，エンゲルスら多数派とヴィリッヒ＝シャッパー派の少数派との対立は「個人的対立」だけでなく「原則的対立」の現われであると規定したが，『ケルン共産党裁判の真相』は「１　前もって」において，この対立を「原則上の相違」とするのは「誤り」であったとしている。

「中央委員会を分裂させたのが，個人的な理由ではなかったことがおわかりになろう。しかし，原則上の相違を云々するのもやはり誤りであろう。シャッパー＝ヴィリッヒ派は自分たちが独自の思想をもっているという栄誉を要求したことはかつてない。この一派のもっているも

かげでおこなわれている，くだらない喧嘩や口論の胸の悪くなるような情景を描きだしている。二人はまた，あらゆる美辞麗句とおしゃべり，革命についての空文句にたいするデマ的なあてこみ，政治活動を立身出世の舞台，いがみあいと陰謀の舞台に変えるやり方を仮借なく糾弾している。この亡命者の空騒ぎは，ドイツ諸邦の政府に，ドイツ国内で逮捕や迫害をおこなう好個の口実を与えた。小ブルジョア的指導者たちは，革命の大業をいやしめ，卑俗化したが，これは反革命勢力を利するものであった――これが，パンフレット『亡命者偉人伝』から引きだされる主要な結論である」(同，XXI-XXⅡページ)。

『亡命者偉人伝』の主要な結論がドイツの小ブルジョア民主主義の大立物たちの俗物根性に対する仮借なき暴露と嘲笑にあったことは認められなければならないが，みられるようにこの『偉人伝』におけるヴィリッヒ批判にかかわっての「兵営共産主義」への着目はみられない。

のは，他人の思想を独特な仕方で誤解したものにすぎない。彼らはその他人の思想を確定したと思っているが，それは信条として確定したのであり，またそれを会得したと思っているが，それは空文句にすぎないのである」(第８巻，399ページ)。

だが「この一派のもっているものは，他人の思想を独特な仕方で誤解したものにすぎない」といわれるときの「他人の思想」とは誰の思想なのであろうか。これに解答を与えているのは「気高い意識（こころ）の騎士」の以下の一節である。

「気高い意識は，一瞬間，彼特有の『術策的』処理の領域から理論へと舞い上がる。しかし，それは見かけだけなのだ。実際は，彼は依然として『マルクス君の術策の見本』を示しつづけるのである。『ケルン共産党裁判の真相』の８ページ（第８巻原典ページ413。邦訳，上記399ページ――引用者）には，こうある。「シャッパー＝ヴィリッヒ派（ヴィリッヒ君はヴィリッヒ＝シャッパーと引用している）は自分たちが独自の思想をもっているという栄誉を要求したことはかつてない。この一派のもっているものは，他人の思想を独特な仕方で誤解したものにすぎない。世間に，自分にも独自の思想の手持ちがあることを証明するために，W（ヴィリッヒ――引用者）君は，最新の発見だといって，しかもエンゲルスと私の見解への反駁として，小ブルジョアジーは，もしそれが支配するようになれば『どんな方策［Institutionen］をとる』かを告げている。エンゲルスと私が起草した一つの回状（1850年３月の中央委員会の同盟員への呼びかけ――引用者）があるが，これはザクセン警察がビュルガースのもとで押収し，ドイツでもっとも読者の多い諸新聞に掲載され，ケルンの起訴状の基礎になったものである。このなかにはドイツの小ブルジョアジーのかなわぬ願いがかなり詳しく叙述してある。これがヴィリッヒの説教の種本なのだ。読者は原本と写しとを比較されたい。『独特の誤解』付きであるとはいえ，悪徳の引き写しをやるとは美徳も何とやはり人の子ではないか。文体の改悪は意向の改善で埋め合わせているというわけである」(第９巻，495ページ)。

これによると「ヴィリッヒの説教の種本」はマルクス，エンゲルスの「1850年３月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」であり，それを「誤解付き」で「信条」として「確定」したものであることになる。それゆえヴィリッヒ＝シャッパーの思想と行動をヴィリッヒ主義と呼ぶとしても，マルクスがここでわざわざ「シャッパー＝ヴィリッヒ派」と記していることからすると，その思想的・理論的源泉はヴィリッヒではなく義人同盟以来の最古参の理論家シャッパーであることを示唆しているとみられる。

ヴィリッヒ＝シャッパー派の策動は共産主義者同盟の解体をもたらしたとしても，マルクスは，それは革命の敗北につきまとう歴史的挿話とみなし，なお恕すべき余地もある「過失」とみなしていたかにもみえる。そこでマルクスは後年の1875年版『ケルン共産党裁判の真相』の「あとがき」で，このように書く。

「革命が暴力的に鎮圧されると，その革命の共演者たちの脳裏には，とくに故国の舞台から追放された人びとの脳裏には，有能な人物すら，しばらくのあいだはいわば分別を失ってしま

うような衝撃が残るものである。彼らは歴史の歩みに順応することができず，運動の形態がすでに変化していることを理解しようとしない。だから彼ら自身にとってもまた彼らが身を捧げている大業にとっても同じように有害な陰謀遊びや革命遊びが生じるし，シャッパーやヴィリッヒの犯したような過失も生じるのである。ヴィリッヒは北アメリカの内乱で，自分が空想家以上の人物であることを示した。また，終生，労働運動の前衛闘士であったシャッパーは，ケルン裁判の終わったのち，まもなく自分の一時の過ちを悟って，それを告白した。後年，死の前日，臨終の床にあって彼は私に『亡命者の愚行』時代のことを，なおも辛辣な皮肉をまじえながら話した。他方では，『真相』の書かれた当時の事情を知れば，共同の敵を心ならずも利した者を痛烈に攻撃しなければならなかったことが明らかになる。危機の際に軽率な振舞いをすることは党に対する犯罪であり，この罪は公然と償われなければならない」(第８巻，560ページ)。

しかし，歴史はヴィリッヒ主義の兵営共産主義以上に巨大なスケールの兵営共産主義構想を送り出す。それがバクーニン主義・ネチャーエフ主義の兵営共産主義構想である。項を改めて進もう。(未完)